日本人の美徳（概論）

2020 年 1 月 11 日

☆「歴史から消された日本人の美徳」より抜粋
著者：黄　文雄（おう　ぶんゆう）：台湾生まれ、早稲田大学を卒業し、在日 40 年を超える文筆家

はじめに

時代によってそれぞれの時代の道徳がある。万物は流転、もちろん道徳も決して永遠不変なものではない。倹約や清貧が美徳の時代もあれば、消費こそ高度経済成長期の美徳となる時代もある。

「自由」が生命以上の価値とされることもあれば、「犠牲」や「滅私奉公」が、社会最高の美徳とされる時代もあった。古来、日本にはそれぞれの徳や美があった。「和」や「誠」はそれである。

日本が有史以来、新しい文明と遭遇したとき、決して「文明の衝突」という事態を招かなかなかったのはなぜか。「文明の改宗」とまでいわれる開国維新後も西風東漸、西力東来の事態を「和魂洋才」で乗り切り、それが近代日本をつくった原動力でもある。もちろん、社会が変われば社会規範である道徳も変容を迫られる。

かつての日本は、犯罪が少なく、世界でも治安の優等生であった。しかし少なくとも９０年代のバブルがはじけた頃から、日本での凶悪犯罪が増えている。これを道徳の退廃と嘆く人は少なくない。だから今、道徳教育の必然性を主張する論調が再燃しているのであろう。戦後、道徳教育が廃止されたことが、大きく影響しているという人も多い。

戦後の反日教育、偏向教育、ゆとり教育の結果、しつけがおろそかにされ、学級崩壊、学力低下をもたらし、なかでも最も深刻なのは、道徳の荒廃というわけである。

だが、道徳教育を復活させ、道徳教育さえしっかりやれば、道徳の荒廃を克服できるのかというと、そうとは思えない。その好例が隣国中国である。

中国文化の最大の特色といえば、倫理道徳を最高の価値とする社会であり、それが最大のお国自慢でもある。しかも二千年以上にもわたって、「道徳教育」を最も口やかましく叫び、実践してきた。

しかし、数千年にわたる道徳教育の結果、中国という国は不道徳な国の代名詞になっているのだ。実際この国では、世界で最も戦乱が頻発し、殺し合いが行われてきた。その過酷な社会で民衆は、「戮心りくしん」といわれるほどの、殺戮される悲惨な民と物騒な国民性をもつに至っている。

では、「真」や「美」ではなく、「善」を社会最高の価値として、数千年にもわたって、それほどまでに道徳教育を、教育の核にしてきた国であるにもかかわらず、なぜ今日に至って、世界で道徳最低の国になってしまったのだろうか。

その歴史的背背景は、すでに儒家の始祖である孔子の時代から存在する。これについては老子がずばりと「大道廃れて仁義あり」と指摘している。しかも「棄仁絶義」（仁義を棄てる）べきだと提言している。にもかかわらず、儒家の道徳は生きつづけたのだ。

しかし、「仁義道徳は、書物に山のように書いてあるだけ」という射訟氏の指摘は、今ではすでに常識となっており、実際の中国社会には、道徳を体現している人間など見当たらない。

「衣食足りて礼節を知る」という言葉もあるが、実際中国では衣食の足りない人間が多く、「倫理道徳」をうんぬんするどころではないのだ。

数千年の「道徳教育」の結果、「道徳最低」の国家になってしまった理由について、私が永年思索しつづけて得たのは、儒教倫理は家族倫理であって、社会倫理ではないということである。儒教は、教という名が付いてはいても、信仰に基づいた宗教ではないのだ。したがって内心から出た道徳心ではなく、あくまでも外からの強制によって成り立つ教えであり、規範なのである。それゆえに、良心というものを育てず、逆に人々から良心を奪ってしまったのだ。そして儒教は偽善者しか育てられなかったのだ。

この道徳教育が、道徳の荒廃をもたらすという歴史的大実験の結果を、日本人は見逃してはならない。

ではなぜ日本は、今日、このような道徳的退廃を招いてしまったのだろうか。道徳教育の復活で克服できるのだろうか。この問題を再考せざるを得ない時期に来ていると思うのだ。さらに大切なのは、その道徳教育の根源をあらためて究明せざるを得ないこととも思う。

歴史を振り返ってみると、日本社会が絶えざる発展と進歩を遂げ、より高次元の境地を究めることができたのは、勤勉や誠という美徳があった上に、求道、すなわち「道」を究める精神が大きな役割を果たしてきたことが分かる。

日本は有史以来、新しい文明と遭遇したとき、決して「文明の衝突」という事態を招かなかった。文化摩擦はそれなりに起きているが、それでさえ、唐風か、国風か、欧風か、といった波風が見られる程度である。

隋唐文化が日本列島に入ってきたときは、「和魂漢才」と称して穏やかにそれを受け入れ、仏教伝来についても神仏習合という手法で、長い歴史のなかで神と仏を共存させた。また近現代の明治維新前後の、西風東漸、西力東来の事態も、「和魂洋才」で乗り切ってきたのは前述の通りだ。その上で日本独自の文明を作り上げている。

このように、すべての文化文明を習合していく日本社会には、神代の時代から「和」の原理か存在しており、それが超安定社会に大きく寄与している。その原理に支えられていたからこそ、伝統的な美徳も守られてきた。

戦後日本は、「市民主義」と「平和主義」が跋扈し、それが国民主義にとって代わろうとしている。だから伝統的な文化、精神、価値が否定され、伝統的な日本人の美徳が歴史から消されたのである。今日本人が「道徳的退廃」と嘆くのも、現実そのままがそうだからである。

かつて台湾人は［日本植民地時代を美化する］と誤解されるほど、戦前の日本人を敬愛していた。私が学生のころ、母は説教でよく二宮尊徳や小野道風といった日本人を模範とすべき人物として実例にあげていた。今もなお台湾で神様として祀られている日本人警察官に森川清治郎、広枝音右衛門等がいるのは有名な話である。反日国家である中国、韓国、北朝鮮とは対昭的に台湾人が親日だといわれるのは、決して間違いではない。それは日本教育を受けた年輩者とは限らず、青年層にも多い。

それは、日本人の先人たちが国を愛し、土地を愛し、お国のために一筋に、進取の精神に富み、日本人としての誇りと気骨をもっていたからである。それが台湾人にとって素晴らしくまぶしく見えたのである。

現代日本の道徳の退廃、その最も根源的な因果を辿れば、日本の伝統的な美徳が抹殺された一方、今それに代わる新しい美徳がいまだ創出の途上にあるからではないだろうか。この退廃に立ち向かうには、単なる道徳の復活を叫ぶことではなく、まず日本の伝統的美徳がいか

なるものであるのか、もう一度その原理をよく知り、その価値を問い直すことが必要なのではないだろうか。

本書が他山の石になれば、幸甚である。

平成十六年十一月

黄　文雄

１．予言された「強大な国家」としての日本

大航海時代に日本を訪れた宣教師たちの記録に、日本人の**知性**や**道徳**は世界最高であると書かれている。当時は戦国時代、天下分け目の戦いを展開しているさなかであった。その乱世のなかでも、日本人の振る舞いが**礼儀正しく、徳の高いもの**であることに驚嘆してイエズス会に報告の文書を書き送っている。

１５４９年（天文十八年）８月１５日に、種子島に上陸したスペイン人イエズス会宣教師、フランシスコ・ザビエルは、ゴアのサンパウロにいた、コレジヨ修道士宛の書簡のなかでこう述べている。

「此の国の人は礼儀を重んじ、一般に善良にして悪人を譲らず、何よりも**名誉**を大切にすることは驚くべきことなり」

「俗人の間には罪悪少なく、また道理に従ふことは“坊主”と称する、パードレ（神父）及び祭司に勝れり」

また、ザビエルに同行したパードレ・コスメ・デ・ドレスが、布教地の山口からスペインのバレンシアのイエズス会士に宛てた書簡にも同様の記述がある。「日本人はきわめて理知的であり、**道理**によって身を処することはスペイン人に劣らず、あるいはそれ以上である」と、褒め讃えている。当時の日本人の教養と徳性が、世界中を伝道していた西洋知識人を驚かせたのだ。

日本では古代より**質の高い社会**を形成していた。十六世紀のスペイン伝道師の記述を待つまでもなく、三世紀に書かれた『魏志倭人伝』（正確には『三国志才』、『魏書』の東夷伝）には、「窃盗せず、訴訟少なし」という記述があり、**穏健で徳性ある社会**を営んでいたことがうかがわれる。

中国は当時から「梁山泊（りょうざんぱく）」の国情があった。その国の人間が「泥棒がいない」と倭の国について、これまた驚いて記録に残したのである。

道義、儀礼に厚い国として、西洋人伝道師が見た日本は、その後徳川幕府の下、三百年近くにわたる天下太平の時代を経て、さらに礼儀、道義の類として成熟していった。

１８５６年（安政三年）、下田に来航したアメリカの初代駐日公使ハリスは、『日本駐箚日記（ちゅうさつ）』に、永年鎖国下にあった日本の、開国後の姿について、「日本の国民にその**器用さ**と**勤勉さ**を行使することを許しさえすれば、日本はやがて偉大な強力な国家となるであろう」と予言した。

日本人は歴史的に見ても、道理、すなわち人の取るべき道について敏感であった。道理がどのように人々に説かれていたか、源平の合戦をつぶさに描いた『平家物語』にその一端を見ることができる。

『平家物語』では、全編を通じて、武士たちがいかに道理や義を重んじるかを描いているが、なかでも平清盛の長男、重盛を通じて、当時の道義心のあり方を見事に描き出している。『平家物語・巻第二』の「教訓状」のくだりを見てみよう。

重盛は、父清盛が後白河法皇に裏切られたことに怒り、謀反を起こそうとしたとき、父に向かって道理を説く。

重盛はまず、聖徳太子の憲法十七条の第十条を引用する。第十条の大意とは「人にはそれぞれ思うところがあり、その是非を言い募っても仕方がない。そのときは自分が罪を犯さぬように身を処すべきだ」というものであった。

その上で重盛は、父に向かって、仏教の四恩の一つである国王への恩を忘れるな、恩を裏切る罪を犯すな、と説く。そして最後に「神明仏陀感応あらば、君もおぼしめしなす事、などか候はざるべき。君と臣とならぶるに、親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、いかでか道理につかざるべき」と、自分は血縁のある父ではなく「道理」を選ぶ、道理を守れば神仏の加護があるはずだと言明して、清盛の謀反を押しとどめたのだ。

『平家物語』は当時最高の知識人である僧侶たちによって書かれたので、作者は、この重盛のとうとうたる弁舌のなかに、神への信仰、仏への帰依とその教えとする道理を、くまなく盛り込んでいる。文芸による宗教書とも読める一大巨編である。

平安末期から、仏僧たちは、貴族など限られた階級の人間だけを、対象とする奈良仏教に反旗を翻し、一般大衆への教化を強力に推し進めはじめる。鎌倉時代になると親鸞、道元、栄西、　日蓮、一遍上人など高僧が輩出し、仏教は一挙に一般大衆にも浸透しはじめる。

道元は仏法の道理を分かりやすく説くための『正法眼蔵』を著し、また弟子たちが道元の言葉を記した『正法眼硫随聞記』などによって、一般民衆にも、道理・ご徳の考え方が広まっていった。日蓮もまた「仏法と申すは道理なり」と、広く一般民衆に、いかに生きるべきかを説いた。

２．日本と中国の道理の違い

道理を説く宗教として、仏教、儒教を共有するといわれる中国と日本だが、その受け止め方、社会でのあり方には、相当な違いがある。

台湾人の目から見ると、大陸の中国人の性格で最大の特徴は、「不講道理」という、一言で表せる。すなわち道理が通じない人間であるということである。道理・道徳を守らない。中国の古い諺にはまた丶、「秀才遇到兵有理説不清」というのがある。これは文士が兵士にあって、いくら道理を説いても、聞くはずがないということである。

こうした中国の道理と道徳軽視の風土の元凶は、儒教に求めることができよう。儒家も善悪の道徳観をもち、「五倫」や「五常」を説いているが、そこには重大な自律的意識や悟性が欠落している。それは「良心」である。これは仏教が説く過去世、現在世、未来世の観念をついに、中国人が受容しなかったことにある。

仏教は三世の因縁によって、罪業が人にも山川草木にも輪廻すると説く。この輪廻を信ずるがゆえに、人は因果応報を思い、現世の行いを慎むという、良心をもつことになる。

孔子は、性悪説の上に立つ。人は本来的に悪をなすものであるから、それには道徳が必要だという。孔子は世の中が乱れるのは、そうした本来悪をなす人間が、乱世に乗じて道徳を忘れるからであるとして、「仁・義・礼・智。信」を定めた。ゆえに「仁・義・礼・智・信」を守れば良しとした。神や仏との良心のやりとりではなく、規範を守れば、現実を規範に則って

処すれば、良しとしたのだ。したがって中国の儒家の道徳には、心からの、良心からのという意識と動機が欠落するのである。

老子は、孔子に真っ向から反論する。仁義道徳があるゆえに、人は惑い、社会が乱れると主張した。老子は孔子の道徳を、人為的な口先だけの道徳だという。老子は、天という大地・自然・宇宙の理のなかに、人の生きるべき道があるとした。

この大きな道理のなかで生かされること、すなわち「無為自然」を主張した。「無為自然」とは、大自然がなんら謀ることなくして、万物を産み、多くの生き物を養うように、人の小賢しいはからいを去る、ということだ。

しかし、老子の教えは、後に道家の思想として道教となり、不老不死思想やある種の呪術と結びつき、一方で本来老子の説くところの清冽な生き方は、浮世離れした非現実的なものとされる向きもあり、中国社会の道徳の中心にはなり得なかったのだ。

日本でも、儒学思想は大いに取り入れられ、武家社会の規範として重んじられた。とくに「義」の概念は、日本武士道の根源をなす思想として導人され、孔孟の「義を見てなさざれば勇なきなり」という言葉は、武士の行動の規範とされた。

しかし江戸期になると、本居宣長は、日本の和歌をはじめとする文芸について、「儒仏による善悪にあずからぬ事」と論じて、日本には古来「いにしえ心」、「和心」があると「古学」を提唱した。宣長は仏教とともに儒学の倫理とはかかわりなく醸成されてきた、**日本精神「まことの道」**があると主張するのである。宣長は「まことの道」は「**古代の神々の生活のなかに形成された習俗**」であるという。しかし、神々は規範を「理」として語ることはなく、神々の行いそのものが規範であったと説いた。それを感受するのが、日本の「**誠**」であるとしたのだ。

江戸期においては、この本居宣長の漢意（からごころ）の否定、あるいは儒学離れと並行して、日本の儒学者たちは儒学をとらえ直し、日本独特の風土において、中国とは異なる解釈、道義を考察している。

当時隆盛していた朱子学における「敬（つつしむ）」の思想の検証からはじまり、朱子学から距離を置き、より儒学の本質に迫ろうと、山鹿素行、伊藤仁斎らが「古学」と称して、あらためて仁義、忠信への考察を行う。彼らは儒学の「義」から出発して、神道の精神である清明心から説き起こして日本独自の「**誠**」という観念を導き出した。これが最大の功績であろう。

その「誠」は、幕末の志士たちに「至誠」という、心の内から湧き出すやむを得ざる真情と、外に向かう行動を一致させようという、思想をもたらした。志士たちの実践的な「誠」のエネルギーが、明治維新へと、時代を動かしたのだ。

中国の儒学から、ついに「誠」という心性を、日本の儒学は引き出したのである。

３．戦後廃止された道徳教育の落とし穴

日本は儒学思想を受け入れ、さらに日本は独自の儒学思想をうち立てたとも述べた。しかし、日本の儒学そのものに、疑問をもつ人々も相当数いたのである。

歴史学者　津田左右吉は、その疑問を最も先鋭に言明した人である。「要するに、儒教が日本化した事実はなく、儒教とはどこまでも儒教であり、支那思想であり、文学上の知識であり、日本人の生活には入り込まなかったものである。だから、日本人と支那人とが儒教によっ

て共通の教養を受けているとか、共通の思想を作り出していると考えるのは、まったくの迷妄である」(『支那思想と日本　津田左右吉』

先に触れた本居宣長は、古典を読み解こうとするならば、まず漢意（中華思想、漢学）を排除しなければならない、と考え、大和心の真髄に迫ろうとしたのである。これは宣長の師である賀茂真淵の意を受けたもので、真淵は「からごころを清くはなれて、古のまことの意をたずねる」と説き、古言によって古意を得ることだと、国学を提唱した。この師弟は『万葉集』、『源氏物語』から、古語を解きほぐし、やまとごころを発見していった。

少なくとも９０年代のバブルがはじけてから、日本で凶悪犯罪が増えた。これは道徳の退廃によるものだと嘆く人は少なくない。だから、道徳教育の必要性を主張する論調が再燃している。戦後に道徳教育が廃止されたことが、大きく影響しているという人も多い。

戦後の日本人は、戦前に比べ、不徳になりつつあるのはたしかである。老若男女を問わず、正義感も、責任感も、道徳心も、茫漠として世の中に見えてこない。これは私の実感である。日本人が、エコノミック・アニマルといわれ出した６０年代から、その兆しはあった。私の滞日四十年間で、年々悪化の一途を辿っており、それにつれて道徳学者たちからの批判の声も高まってきているのだ。

すでに７０年代に入ってから、私がよく見聞きした世相、世態は、道義がまったく地に堕ちたものだった。以下は、昨今の世情を嘆く言葉である。

「世情は酷薄をきわめた。小手先の欲望を刺激する情報ばかりが氾濫し、無責任の言動が平気で飛び交う。誇張と扇動と欺瞞の充溢する乱世である。」

「国民道徳は地に堕ちて、ついには経済動物なりと、外国から罵言を浴び、実に名誉ある日本民族最大の恥辱を受けた」

「世は泗々（しし）として、軽佻浮薄に流れ、人は贅沢に慣れ、華美を競う。質実の風は地を掃い、剛健の気はさらに微塵もなし」

「親が我が子を平気で殺し、また子が親や兄弟を傷つけて、平然としている。眼中、ただ我が身の利害あるのみで、他人の迷惑など知ったことではない」

「礼之国と称せられてきた我が国が、今や昔日の面影はなく、経済動物なる汚名を頂戴するにいたった。まことに日本人としてこれ以上の恥はなく、何の顔あってか、父祖の雲にまみゆるを得んや」

などなど、拾い集め切れないほど、戦前世代の人間からは、今の世情を嘆く声が上かっている。まさに終末史観や末法思想に覆われた世の中だ。

この歳まで生きていたくはなかったと、私に告げる年輩者もいたほどだ。その理由は、祝祭日のたびに日の丸の国旗を掲げることについて、孫とケンカになるからだ。孫は大きな声で、「おじいちゃん、やめなさい。あれは赤い血を染めた侵略のシンボルじゃないか」と叱るのだそうだ。もうこの世は終わりだと……。

それはそうだろう。古来礼儀に厚い日本人が、無責任、不作法な人種になり果てて、和を貴とした大和民族が、今や互いに自我を剥き出しにして、日本列島が私利私欲の万人闘争の修羅場となっているのだ。日本人は変わった。

いや、ユダヤ人のトーマス・M・トケヤー氏は「日本人は死んだ。日本人お得意の、仕方がない、の哲学では蘇生できない」と宣言をしている。

では、なぜ、日本人は死んだのだろうか。多分、国民主義に代わって、戦後は市民主義と平和主義が台頭し、伝統的文化、伝統的価値観、伝統的精神までが否定され、これまであった美徳が捨てられてしまったからである。もちろん、その理由は、きわめて多元的で決して単一の理由ではない。

しかしその元凶の一つは、戦後の民主主義のイデオロギーが、自由、平等、博愛を標榜する進歩的といわれる思想であり、その虚妄と欺瞞に気づくことなく社会主義的イデオロギーに遭遇したことも、伝統的な美徳を粉砕し尽くした最も強大な要因であろう。

４．今取り戻す日本人の美徳

日本社会の人間の劣化は、９０年代に入ってからは、ことに深刻である。青少年の凶悪犯罪、親の子殺しが増加し、官僚や政治家、国民から大きな信頼を得ていた警察、正義の味方であるはずの、法曹関係者に至るまでがたてつづけに不祥事を起こしている。

民主主義は、価値観の相対性や、多様化を前提にしている。個人の自由を守るためである。しかし、それは同時に、価値観の普遍性や、絶対主義的価値観を否定するものになる。価値観の多様化が許される社会では、常に新しいものが社会の前面でもてはやされ、伝統的価値観や、これまで社会を守ってきた伝統的な美徳も影が薄くなる。その結果、社会的混乱を招き、アナーキーな社会とならざるを得ない。

自由が野放図に認められ、変化に富む社会では、それにふさわしい新しい規範、モラルがすぐさま形成されることは難しい。時代の変化に伴う新しい価値観や規範が生まれてこない限り、モラルの低下や退廃を食い止めることはできないのだ。

高度経済成長期を経て、倹約に代わって、消費が美徳とされた。贅沢がかっこ良さの象徴となり、今や虚栄心さえも肯定されている有様である。かつては勤勉が国民一人ひとりの誇りであったものが、今は道楽や享楽がもてはやされている。

もちろん、個人的価値観は、社会的価値観と違って、ある程度は許容されるべきであろう。それこそ、自由民主主義の本質であり、原理である。しかし、社会的価値観までもが、自由の名の下に浮遊するようでは、社会は混乱し、荒廃することは免れない。それが今の日本である。

戦後日本の民主主義教育が、この社会的価値観を形成するための教育に欠けていたために、今日の社会の混乱を招いたのである。神、あるいは他者を畏怖する心が、社会の道徳を支え、人間の道徳心を養うものだ。畏怖する心がなくなると、道徳は廃れていく。かつての日本人は、まず自然への畏れを抱き、それが神への畏れとなり、ひいては世間様、あるいは他人への畏れとなっていった。畏れとは、はばかる意識であり、それが自分以外のものを大切にする意識を育てるのだ。

では、失った徳という財産を取り戻すために、どのような手段があるだろうか。道徳教育といえば、すぐに戦前の歴史・道徳教育をやるのかと、「反動教育」とレッテルを貼られかねない状況である。古い道徳を守るだけが、有効とはいえないということもたしかである。

倫理道徳とは、決して普遍的なものではない。事件や、不祥事に見られる道徳の退廃は、ただ伝統的な美徳が捨てられたことだけに原因を求めるべきではない。

時代の変化に対応できる価値基準を、今発見し得ていないと考えるべきである。それが、現在の日本社会に見られる、日本人の心、精神性が反映された姿である。

行き過ぎた道徳教育は逆に、不徳の人間を大量に育成し、教育をすればするほど、社会がますます凶悪化するという結果になることもある。隣国の中国がその好例である。それが、儒教道徳教育の恐ろしさである。

儒教のいわゆる「徳育」の歴史をもっと冷静な目で見てみようではないか。儒教は二千年前に国教化された。しかし漢の時代にはすでに、問題だらけの倫理教育として論議され、王莽（おうもう）は儒教王国造りに失敗しているのである。

では、なぜ儒教教育が中国人の良心を奪い、世界で最も不道徳な国民にしてしまったのか。それを説明するには、思想、哲学、倫理学、文化論あるいは心理学や精神分析などの各分野から、体系的に論じなければならないが、ここでは私見のみを若干取り上げたい。

（１）まず指摘しなければならないのは、二千年にわたる中国の儒教教育は、ただ「五常」や「五倫」など、忠孝や仁義の徳目を羅列するだけで、いったい「仁」とは何か、「義」とは何かと、それを唱える教祖の孔子でさえそれぞれの概念を規定してこなかったことだ。「忠」と「孝」との関係や、「孝」と「忠」という両立しがたい矛盾について、語ることをせずに、どういう道徳に基づいて「仁」や「義」が成り立って、なぜそれが徳になるのか、何の論議もせずに、ただありかたい言葉としてしか、人々に与えてこなかったのだ。

（２）儒教倫理は徳目を並べただけであるので、単なる外的な強制にしかなり得なかった。宗教的な信仰のように、内発的なものではない。お題目として外的にただ押しつけるものであるため、押しつければ押しつけるほど、本来はあったはずの良心の出番がなくなり、中国人を最も良心のない民族に仕立て上げてしまったのである。

（３）また、儒教倫理はそもそも家族や宗族の倫理である。梁啓超氏が指摘したごとく、中国には広く社会が共有する倫理は存在しないのである。それどころかその家族的倫理規範を、無理やりに国家次元まで広げ、「治国平天下」の倫理規範に仕立て上げた。国家という大きな問題にはそぐわないために、逆に天下に大乱を招き、しかもお題目を平気で踏みにじる偽善者を大量生産したのである。

こうした欠陥がありながら、二千年間、中国は儒教のドグマを、倫理道徳的規範としてきたのである。その結果、中国社会は、人間不信の社会になり、盗賊が跋扈し、政治は汚職・収賄にまみれ、独裁専制がまかり通り、人権は蹂躙される。自然環境や経済的な状況が加味していることもあろうが、精神という最も基本的な要素を軽視する風土を、儒教が作ったことは間違いがない。私はそれを「儒禍」と呼ぶ。

日本は儒教を受容したが、それ以前にあった**神道**を捨てることなく、**仏教**も受容し、独特の**日本の倫理規範**を作ってきた。中国のようないわば儒学一神教、儒学独尊ということはなかったのである。

日本が作ってきた美徳が、失われようとしているとき、美徳をそのまま回帰させるのではなく、それをどのようにこれからの時代に有効に活かしていけばいいのか。それを考えてみるために、私なりに、これから**日本人の美徳**について論じてみたいのである。

以上